

外国語活動における文字導入の適期と方法に関する研究 —小・中接続カリキュラムを視野に入れて—

畑江美佳 (HATAE Mika)

鳴門教育大学

要約

小学5, 6年生に外国語活動が必修化され, 音声を中心としたコミュニケーション活動が全国の小学校で展開されている。しかし, 教育現場からは, 音声のみによる活動が高学年児童の実態に合わないとの声や, 中学入学後早急に始まる読み書きへの生徒の抵抗感など, 文字指導をめぐる問題点が指摘されている。現在は, 週1回の領域としての活動ではあるが, 将来教科化される可能性も見据え, 音声から始まる外国語活動と中学校での読み書きをどのように繋げていくべきかについて, その方向性を明確にすることは急務と考える。本稿では, 音声中心論と文字導入論の両論を検討し, 高学年児童の認知発達の特徴に焦点を当て, 小・中を繋ぐ適切な文字指導の時期と導入法を提案する。

(キーワード: 小学校外国語活動, 文字指導, 小・中接続)

1. はじめに

1.1 研究の背景

2011年度より小学5, 6年生に外国語活動が領域として必修化された。小学校学習指導要領第4章「外国語活動」における指導目標は, 「外国語を通じて, 言語や文化について体験的に理解を深め, 積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り, 外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら, コミュニケーション能力の素地を養う」ことである(文部科学省, 2008a)。そのため, 全国の小学校では, 「聞く」「話す」等の音声を中心としたコミュニケーション活動が繰り返されている。

一方で, アルファベットなどの文字や単語の取扱いについては, 「児童の学習負担に配慮しつつ, 音声によるコミュニケーションを補助するものとして用いること」と位置付けている。2012年度から使用されている外国語活動の共通教材, 『Hi, friends!』(文部科学省, 2012a)には, わずかながらアルファベットや単語の綴り等の文字がみられるが, あくまで

も「音声によるコミュニケーションの補助」としての扱いであり、系統立ったカリキュラムの中で中学校外国語科との接続を図るような文字指導は行われていない。

しかし、研究会等で訪れる教育現場では、高学年になった児童に音声のみで活動をさせることに疑問を持つ声も多い。音声のみで活動する限界を感じているという教員もいる。文字に関しては、「音声の補助」としての具体的な扱い方が示されていないため、不安ながらも、活動に用いる対話文を黒板に貼ったり、活動用プリントの一部にイラストと共に文字を載せるといった、教員独自の判断による補助的使用を模索している例もみられる。

1.2 研究の目的

文部科学省も示唆しているように、外国語活動が将来的には教科となる可能性や、低学年から開始される可能性もある。その場合、小学校と中学校での学習内容の整合性が現在よりも明確に求められるであろう。小学校での「読む」「書く」技能の扱いにも議論が及ぶことは必至である。中学校での指導内容をそのまま小学校に下ろすことは、英語嫌いを助長することにもなり兼ねない。また、現行どおりに「音声は小学校から、文字は中学校から」となれば、英語教育の大幅な改善には至らないであろう。小学校で文字を教えることが適切なのか不適切なのかという議論も含め、教えることになった場合、何をいつからどのように活動の中に組み込み、中学校へと繋げていくべきか等、今から理論と実践の両輪共に十分に研究し検討し始めなければならないと考える。本稿は、小・中接続カリキュラムを想定した場合の、文字導入の時期や導入法に関する基礎研究である。尚、本稿では、カリキュラム上の小・中の繋がりを「小・中接続」と呼ぶこととする。

2. 先行研究

2.1 『Hi, friends!』での文字取扱いの実際

『Hi, friends! 1』 Lesson 6 ではアルファベットの大文字が扱われている（図1）。「アルファベットの大文字とその読み方とを一致させること」が単元目標に含まれ、「ポイントゲーム」等の具体的な活動案が掲載されている（文部科学省、2012b）。また、小文字は『Hi, friends! 2』 Lesson 1 で同様に扱われており、「大文字と小文字の対応を知ること」等を含んだ活動案が掲載されている。評価基準も、「アルファベットの小文字を見て読んだり聞いたりしている」と明記されている。しかしながら、アルファベットを使った活動は、これらの Lesson 以降、継続した形で取り扱われてはいない。

次に、単語や文が文字で表記されているところは数か所ある。『Hi, friends! 1』 Lesson 8 では



図1 『Hi, friends! 1』 Lesson 6

曜日を表すイラストに、『Hi, friends! 2』Lesson 2 では暦の月を表すイラストに、また、『Hi, friends! 2』Lesson 7 の桃太郎の物語のイラストに単語や文が添えられているが、具体的に文字を読ませる活動案は示されていない。apple, banana のようにイラストのみで意味が理解しやすい名詞と違い、抽象的な名詞や物語の文章はイラストのみで意味を十分に理解させることが困難なため、「音声によるコミュニケーションの補助」として文字が添えられていると考えられる。このように、『Hi, friends!』は、ほとんどが音声を中心とした活動であり、現在の外国語活動で与えられる文字の知識は、アルファベットの大文字・小文字に慣れ親しむ程度のもものと判断できよう。

2.2 外国語活動における音声中心論

「母語の場合、音声によるコミュニケーションがほぼ成立していることが、読んだり書いたりすることの前提となっているため、小学校の外国語活動においても、児童が音声に十分に慣れた段階で文字を導入することが大切であり、文字に対する知的欲求が高まると考えられる高学年の児童といえども、音声での指導を先行させ、文字を読みたい、書きたいという欲求が生じるまで文字の導入を遅らせるべきである（文部科学省、2009a）」とするのが、外国語活動における音声中心論である。

同様に、岡・金森(2009)は、子どもが日本語を習得する過程を考えても明らかのように、文字（アルファベット）を書けるようになることや発音とつづりの関係を覚えることは、音声に慣れた後でも十分に可能であり、音声形式として身についた能力があつてこそ文字への興味が高くなり、文字指導の効果も上がることを期待できるとしている。

津波(2012)は、中学校への繋ぎのために小学校高学年で文字を導入するということは中学校側の課題であつて、音声に慣れた子どもたちを中学校へ送ることだけでも十分な繋ぎになっているという。小学校の段階だけで成果を出そうとするとどうしても無理が生じてしまうため、重要なのは、むしろ中学校以降の指導をどう改善していくかであり、週に1回程度しかない小学校の「英語活動」（引用文献中の英語活動という表記に関しては、現在は「外国語活動」と呼ぶため、「英語活動」と括弧付けで記す。以後も同様に記す。）では、「聞く、話す」という音声指導を重視し、「読み、書き」については中学校へという連携を意識したカリキュラムにすることが望ましいとしている。

2.3 外国語活動における文字導入論

一方、JASTEC 関東甲信越支部調査研究プロジェクト・チーム(2001)は、音声による児童の英語学習をサポートする方略のひとつとして文字を導入すれば、より豊かな言語活動を促し、学習効果の定着と蓄積を確実にすることができるという基本理念を提唱した。そして、音声主体の言語活動に文字の使用を加える意義を、①子どもの知的欲求に合致していること、②音声の把握を自覚的、分析的にさせること、③記憶内容を定着、蓄積させること、④自習を可能にし、学習材料を拡げることであるとしている。

佐藤(2011)は、「英語活動」を音声の指導から始めることを適切としながらも、子どもは

年齢が上がるにつれて次第に文字に関心を持つようになり、抽象概念や分析力が身につくため、音声から文字への関心が現れる時期を慎重に見ながら、文字指導を促す必要があると指摘する。十分な音声指導に文字が導入されることにより、子どもたちは音と文字の関係に気づくようになると述べ、中学校で英語嫌いになる生徒が多くなるのはこの文字指導が十分できていないからであると分析している。

畑江(2011a)は、低学年と高学年における文字注視による語彙習得の差を実証し、小学5、6年生の時期に音声と同時に文字のインプットも自然に増やすことが重要であるとした。つまり音声と共に自然に文字が目に触れる形で長い時間をかけて慣れ親しませ続ければ、児童の負担になるどころか、文字を扱ったコミュニケーション活動が可能となり、高学年児童の英語への興味・関心を持続させ、さらには、中学校で始まる本格的な英語学習のハードルを低くすることが可能になるとした。

2.4 現状における問題点

ベネッセ教育研究開発センター(2009)による全国の中学2年生を対象にした調査では、英語学習に関して「最もやる気が高かった時期」は中1の始め頃(43.6%)だが、中1の夏休み後には急降下する(5.2%)。「英語を苦手と感じるようになった時期」への回答は中1の後半(26.6%)が最も多い。また、中学生に好きな英語の活動を問うと、「聞く(47.1%)」「話す(46.8%)」「書く(46.3%)」に対して、「読む(34.0%)」ことが最も低い。

松川(2007)は、小学校で楽しく「英語活動」を経験した子どもたちが中学校に進学し、英語に対する学習意欲とコミュニケーションへの積極性が次第に低下していく事例について、現状では、学習の目的、内容、学習活動の性格、評価の方法などの点で、小学校と中学校との間の「段差」が、教員にも児童・生徒にも強く意識されていると指摘する。そして、そのような「段差」の認識を乗り越える一つの試みとして、音声中心の小学校「英語活動」をいかに読み書きを含めた英語学習に繋げていくかということが、近年の研究開発学校の課題になりつつあると述べる。

小学生という時期に文字を与えることに関して、中村(2006)は、害悪がなくその後の英語学習に対して良い影響が出るのであれば与えれば良いと述べる。しかし、本来は小中連携も視野に、適期教育の観点からどの時期に、どういう形で文字を導入すべきか、あるいはしないままでおくほうがいいのか、という議論をすべきだが、それができていないという。

3. 本研究

3.1 研究課題

中学校に入学すると、すぐにアルファベットを含む文字の読み書きが始まり、授業では文法的正確さが求められ、筆記テストで成績がつけられる。小学校と中学校との文字に関する「段差」に困惑し、中学1年生で既に英語を苦手と感じるようになる生徒の姿がここにある。これを、すべて中学校側の問題と片付けてしまってもよいだろうか。

小学校での文字指導については、賛否が分かれるところである。音声中心論では、「聞く→話す→読む→書く」という母語獲得時と同じ過程をとり、音声十分に習得されてから文字へと進むべきとしている。一方、文字導入論では、文字なしの環境での活動が高学年児童の認知発達に合わないとし、音声を伴った文字導入を推奨している。文字指導に関する論争は、中村が指摘するように「適期教育」の観点から深く論じられるべきである。本稿では、文字導入をめぐる問題を、その適期と方法に絞り検討したい。

3.2 小学生の外国語活動に対する意識の変化

中学入学後の英語のやる気の低下は2.4で示したが、小学生へのアンケート調査（文部科学省，2009b）の、「英語の授業は好き、もしくはどちらかと言えば好き」という項目の回答を、低・中・高学年に分割し結果を考察したところ、学年間に差が生じていることが確認された（畑江，2011b）。結果は、低学年(88.0%)、中学年(80.4%)、高学年(67.3%)と、学年が上がるにつれ低下しており、「英語の授業に進んで参加していますか」の問いにも同様の傾向がみられた。英語への意欲や積極性の低下の兆候が、小学校高学年からすでに始まっているといえよう。平木(2011)は、中学校が覚悟しておくこととして、外国語活動で英語への苦手意識を持ったり、嫌いになったりする生徒がでてくる可能性が十分にあると述べ、小学校から中学校へのスムーズな接続のための取り組みが十分に進んでいないのが現実であるとする。さらに、小学校段階で英語への苦手意識を持ってしまった生徒、興味をなくしてしまった生徒には中学校で「再チャレンジ」の機会を与えることが必要となるはずだと述べる。

小学校ですでに英語への意欲を失う子どもを前提に、中学校で「再チャレンジ」させるとするのは子どもには酷な話である。児童に負担を与えないようにとの配慮から文字を扱わず、音声を中心としたコミュニケーション活動を行ってきたはずなのに、小学校ですでに英語への興味を失わせ、苦手意識を持たせてしまうのは、その活動自体に何らかの問題があると考えられ、小学校で発生した問題を中学校に丸投げするのでは、外国語活動をする意義どころか、中学校の立場から、外国語活動をしないほうがよいとの指摘があっても反論できないであろう。

一方、活動内容によっては、高学年になるにつれ興味度が増してくる項目も確認された。小学生が「英語の授業で楽しいと思うこと」を活動内容別に回答した結果を、同様に比較したところ、「英語の歌を歌うこと」は、低学年(90.6%)、中学年(82.4%)、高学年(61.4%)と低下し、「英語で友達と話すこと」も、低学年(79.3%)、中学年(76.4%)、高学年(65.7%)と低下している。しかし、「英語の文字や単語を読むこと」は、低学年(38.2%)、中学年(47.6%)、高学年(54.3%)と上昇し、「英語の文字や単語を書くこと」も、低学年(26.5%)、中学年(42.2%)、高学年(50.9%)と、高学年になるにつれ数値は上昇している。成長に伴い、歌を歌ったり、話したりすることに消極的になる高学年児童が、英語を読むことや書くことには興味を持ち始めていることが明らかになった。

野呂(2007)は、高学年になると歌は歌わず、身体を使った活動に乗らず、ゲームでさ

えもだるそうにし、さめた態度をとる傾向にあることを指摘する。そして、低学年児童は知覚的直観，身体運動や具体的な経験から学習していくが，児童が高学年になるにつれ，徐々に抽象的概念を理解し，分析できるようになるため，高学年児童に対する「英語活動」がいつまでも音声中心になるのではなく，児童の発達段階に応じた指導が必要になると述べる。

高学年児童にみられるこれらの変化は，Piagetのいう「形式的操作期」の段階に当たる。高学年児童の興味が徐々に文字へと移行していくタイミングで文字を導入していくことが，児童の外国語活動への意欲や積極性の維持につながるのではないだろうか。

3.3 高学年児童の第2言語習得の特徴

では，高学年児童への文字指導は時期尚早なのだろうか。学習者の年齢が10歳から12歳であることに注目した第2言語習得について検討したい。Rivers(1968)は，「聞く→話す→読む→書く」の順は，子どもが母語を習う順序と同じであるとして正当化することがよくあるが，子ども(children)が第1言語を学ぶ状況と，思春期学習者(adolescent students)や成人学習者(adult students)が，第2言語や第3言語を学ぶ状況では，多くの点で異なるという。ここで明らかにされるべきなのは，小学校高学年児童は，子どもなのか，思春期学習者なのかということである。思春期は一般に小学校の高学年10～12歳位から14～16歳位までを指しており，認知発達の観点からみても，高学年児童はすでに思春期学習者に匹敵するといえる。我々は，低学年児童と高学年児童を「小学生」としてひとくくりにせず，小学5，6年生と中学1年生位までを「思春期学習者」という新しい枠で認識し，その時期にふさわしい英語指導を考える必要があるのではないだろうか。

Ellis(1985)は第2言語習得開始の年齢の影響について以下のように言及している。「幼い子ども(young child)は言語を習得しているという意識がなく，第1言語と第2言語の隔たりも感じない。そして発音の面においてはこの時期の子供にはかなわない。ところが思春期児(adolescent)になると，論理的にものごとを捕らえることができるようになり，社会性が身につく，客観的に第1言語とその他の言語とを識別できるようになる。このメタ認知(meta-awareness)の出現により，発音の面では幼い子どもに及ばないが，意識的な学習をするという面では勝っているし，成人(adult)よりもより良い記憶力を持っている点で外国語学習において優れている。」

Chomskyによる言語獲得の生得的メカニズム，言語獲得装置(LAD: Language Acquisition Device)は，第1言語の獲得が終わるとその機能は低下するといわれている。この時期，LADの機能低下に反して上昇していくのが，メタ認知機能である。畑江(2011a)は，この高学年時が英語

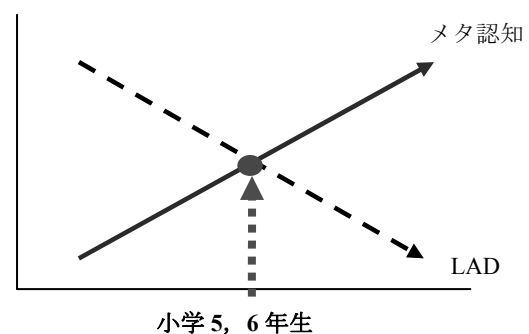


図2 年齢に伴うLADとメタ認知機能の相関 (畑江, 2011a)

を学ぶ上での転換期であるとした。生得的な言語獲得を可能にする LAD の機能低下と、ものごとを論理的に思考し言語習得を可能にするメタ認知機能の上昇がクロスする時期が、小学校高学年あたりであるとし、この時期に高まる欲求と能力に合わせ、最も適切な指導を行うことが児童の力を十分に引き出す英語教育であるとした(図 2)。前述の音声中心論では、母語獲得と同じように外国語活動を捉え、音声習得された後に文字を習得していくとしているが、論理的な思考が可能となり、外国語活動に対しても、音声のみで受け止める能力が低下してくる高学年児童と、それ以前の児童とを分けて英語習得を考えると、「小学生は自然な言語習得が可能である」として 6 年間をひとまとめに論じるのは安易であることに気づくだろう。日本の英語教育においても、「小学生」と「中学生」の間の壁を取り払い、高学年から中学 1 年位までを「思春期学習者」と捉え、活動内容についてもその発達の特徴を生かして再検討する必要があるだろう。

3.4 文字指導に関する小・中接続の方法

中村(2011)は、小学校で読み書きを学ばない理由に、①いわゆる 4 技能を一度に取り扱い始めることには指導上の難しさがあること、②小学校では読み書きに費やせる時間がほとんどないこと、③文字で書き示すと「正しさ」が気になってしまうことを挙げ、小・中連携の在り方について、外国語活動が小学校 5 年生から始まり、それも年間 35 時間と極めて限られた授業時間数であることから、小学校では音声に慣れ親しむことに集中し、主な文字指導は中学校に任せるというつながりが必要だと述べる。

小学校において外国語活動が導入され、特に音声面を中心として外国語を用いたコミュニケーション能力の素地が育成されることになったことを踏まえ、2012 年度施行の中学校学習指導要領(文部科学省、2008b)では、「英語を聞くことに慣れ親しみ」と「英語を話すことに慣れ親しみ」という文言が削除された。一方、新たに加えられたのが、「発音と綴りとを関連付けて指導すること」である。外国語活動での音声中心の学習から中学校での文字を加えた学習を、フォニックス(phonics)という音声と文字とを関連付ける方法で繋げようとする意図がみられる。

アレン玉井(2010)は、フォニックスというのはルールだけを覚えなくてはならない辛い指導法になることもあるとして、フォニックス指導の前に、①アルファベット大文字の学習、②アルファベット小文字の学習、③音韻(素)認識能力(phonological awareness)の訓練を十分にすることが重要であるという。アルファベットの大文字の読み書きが十分でき、小文字もだいたい認識ができる程度の頃に音韻(素)認識を伸ばす活動を始め、小文字がかなり定着し音素に対してある程度の認識ができるまでは、フォニックス指導は行わないとする。フォニックスは、数回の練習で習得できる性質のものではないのだが、中学校では、文字に関してはアルファベットの大文字・小文字の読み方、書き方から始まり、フォニックスで発音と綴りの関連性に気付かせ、その後すぐに本格的な読み書きが始まるのである。

しかし、十分時間をかけて学習されるべき項目を、全て中学入学後早急に扱わなけれ

ばならないのだろうか。アルファベットの大文字、小文字は現在外国語活動でわずかに触れる程度であるが、小学3年生の国語科ですでにローマ字が学習されている。アルファベットに関しては、もう少し定着を意識した活動へと発展させることは可能であろう。音韻（素）認識に関しても、活動で使用する単語の頭文字等と関連付けて意識させることも可能である。また、日本語と書記体系の異なる英語の文字に慣れるためには、「聞く」「読む」のインプットが大量に必要であるため、絵本を活動内に取り入れ、繰り返し声に出しながら文字も同時に目にする活動は、音声と意味を伴った自然なインプットになり、文字導入法の1つとして有効である（畑江, 2012）。

フォニックス指導の前段階としての①②③を、文字に興味を持ち始める高学年児童の活動内で、少しずつ無理のない方法で指導することができれば、中学校でのフォニックス学習や、本格的な読み書き学習への橋渡しとなる。このような段階を踏んだ文字指導が、将来の小・中接続カリキュラムと呼ぶにふさわしい形ではないだろうか。

4. 結論と今後の課題

小学校での文字導入が適期かを論じてきた。低学年では母語獲得に似た感覚的な言語習得が可能であるが、高学年ではその能力の低下やメタ認知機能の上昇もおこるため、音声のみに頼った活動が、彼らの認知発達と合致しているとは考えにくい。個人差はあるが、感覚的な言語処理能力が低下し始めた児童が、第2言語を音声だけを頼りに習得していくには限界があり、それを続けることは児童の不安をあおり学習意欲の低下にもなりかねない。活動内容に音声と共に文字導入も含めて十分に検討することが重要になる。外国語活動必修化によって小学校の「聞く、話す」活動と、中学校での「読む、書く」学習との段差が露呈したが、外国語活動内に高学年児童が興味を持ち始めた文字を使った活動をゆるやかに導入することによって、彼らの知的欲求を満たした興味深い活動となり、英語への意欲の低下を防ぐことができよう。さらに、中学校で性急に文字の読み書きが始まるよりも余裕をもって学習に臨むことができるであろう。図3は、4技能の取扱い時期を、外国語活動必修化以前と以後、そして今後のあり方を提案したものである（畑江, 2011a）。

将来、小学校外国語活動が教科となり、現在よりも授業時間数が増え、中学校との繋がりが真剣に議論された場合、文字導入に関しては、小学5年から中学1年に一連の流れを意識したい。そして、音声を伴ったアルファベット

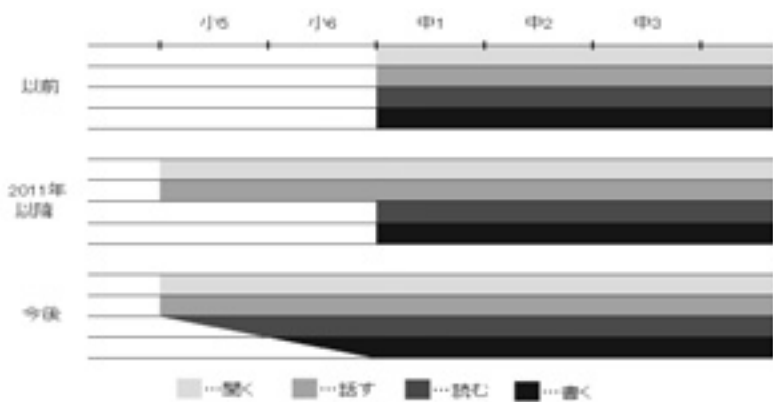


図3 4技能取扱いの時期（畑江, 2011a）

の大文字・小文字の読み書きから始め、音韻（素）認識能力を徐々に高め、中1でのフォニックス学習に繋げるための十分な準備期間として外国語活動を位置付ければ、中学校での4技能の統合に向けた無理のない小・中接続カリキュラムが可能となるのではないだろうか。アルファベットの大文字・小文字を使った活動も、ビンゴや迷路、線つなぎ等のワークシート形式で楽しみながら無理なく継続的に行えると考え。また、6年生からは、『Hi, friends!』内で扱う単語の絵カードに綴りが添えられているものを利用し、イラストと綴りの頭文字の音を意識させながら声に出して練習したり、絵と頭文字を線つなぎするワークシートを工夫して音韻（素）を意識させる。その積み重ねを経て、中学1年時のフォニックス学習へと繋げていくことを提案したい（表1）。

表1 文字の扱いに関する小・中接続シラバスモデル

	5年生	⇒	6年生	⇒	中1初期
指導目標	・アルファベットの大文字・小文字を読むことができる。大文字を書くことができる。		・アルファベットの大文字・小文字の読み書きができる（継続）。 ・英語の音韻と文字の関係に気づく。		・英語の音声・意味・文字を結び付けることができる。
指導内容	・アルファベットの読み書き指導（大文字・小文字の認知）		・単語の絵カードを使った文字指導（音韻レベルでの文字認知）		・フォニックス指導（単語の文字認知）
学習活動	・アルファベットを使った、カルタ取り、ビンゴゲーム、絵本活動、ワークシート(WS)での迷路・線つなぎ・なぞり書き等。		・大文字・小文字の線つなぎ、なぞり書き等のWS。 ・テキスト内の単語の絵と文字の線つなぎ等のWS。絵本活動。		・絵と綴りを見ながらの発話練習。フォニックス・チャートを参照した単語の読み書き等。

今後は、表1におけるシラバスモデルを各学年で系統立てて継続的に実施するために、他の学習内容との整合性の具体的検討、ワークシートや絵本等の教材研究、そして外国語活動内での実証実験を通してその効果を立証していきたい。アルファベットからゆっくと文字に慣れ親しませながら中学での読み書きの学習へとスムーズに繋げる、将来の小・中接続カリキュラムを構築することを、今後の課題として位置付けたい。

【引用文献】

アレン玉井光江(2010)『小学校英語の教育法 理論と実践』東京：大修館書店。
 ベネッセ教育研究開発センター(2009)「第1回中学校英語に関する基本調査（生徒調査）」
 (http://benesse.jp/berd/center/open/report/chu_eigo/hon/index.html).
 Ellis, R. (1985). *Understanding second language acquisition*. Oxford: Oxford University Press.
 エリス, ロッド (著) 牧野高吉 (訳) (1988)『第2言語習得の基礎』東京：ニューカレント
 インターナショナル。
 畑江美佳(2011a)「『聞く』『読む』技能の初期導入に関する研究－小学校高学年からの英

- 語を『読む』技能への素地作りー」『日本大学大学院総合社会情報研究科紀要』12, 31-40.
- 畑江美佳(2011b)「英語を『読む』技能習得のための小・中連携ー小学校からできる文字指導, 中学校へ繋げる文字指導ー」『日本大学大学院総合社会情報研究科紀要』12, 121-132.
- 畑江美佳(2012)「小学校外国語活動における『読む』ことへの第一歩としての絵本の活用」『融合文化研究』18, 2-13.
- 平木裕(2011)「中学校からの英語教育はどう変わるかー小学校との接続を踏まえてー」金森強『小学校外国語活動 成功させる55の秘訣ーうまくいかないのには理由があるー』(pp.222-227) 東京: 成美堂.
- JASTEC 関東甲信越支部調査研究プロジェクト・チーム(2001)「子どもの言語習得と文字ー日本の子どもの英語学習における文字の役割についてー」『日本児童英語教育学会研究紀要』21, 55-72.
- 松川禮子・大下邦幸(2007)『小学校英語と中学校英語を結ぶー英語教育における小中連携』東京: 高陵社書店.
- 文部科学省(2008a)『小学校学習指導要領解説 外国語活動編』東京: 東洋館出版社.
- 文部科学省(2008b)『中学校学習指導要領解説 外国語編』東京: 開隆堂.
- 文部科学省(2009a)『小学校外国語活動研修ガイドブック』東京: 旺文社.
- 文部科学省(2009b)「英語教育改善のための調査研究事業に関するアンケート調査[児童用]」(http://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/gaikokugo/1299796.htm).
- 文部科学省(2012a)『Hi, friends!』東京: 東京書籍.
- 文部科学省(2012b)「『Hi, friends!』年間指導計画及び学習指導案」(http://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/gaikokugo/1314837.htm).
- 中村典生(2006)「小学校英語における文字導入の問題点」『岐阜市立女子短期大学研究紀要』55, 15-22.
- 中村典生(2011)「小学校では英語の読み書きは学ばないのですか?」萬谷隆一・直山木綿子・卯城祐司・石塚博規・中村香恵子・中村典生(編著)『小中連携 Q&A と実践 小学校外国語活動と中学校英語をつなぐ40のヒント』(pp.34-35) 東京: 開隆堂.
- 野呂忠司(2007)「第3章第4節 小中連携と文字指導」松川禮子・大下邦幸(編著)『小学校英語と中学校英語を結ぶー英語教育における小中連携ー』(pp.102-118) 東京: 高陵社書店.
- 岡秀夫・金森強(編著)(2012)『小学校外国語活動の進め方「ことばの教育」としてー』東京: 成美堂.
- Rivers, W. M. (1968). *Teaching foreign-language skills*. Chicago: The University of Chicago Press.
- リヴァース・ウィルガ・M. (著) 天満美智子 (訳) (1987)『外国語習得のスキルーその教え方』東京: 研究社出版.
- 佐藤佳子(2011)「小学校外国語活動における音声と文字指導の導入について」『日本女子大学紀要文学部』60, 123-132.
- 津波聡(2012)「音声指導を大切にーフォニックス指導について考えるー」岡秀夫・金森強(編著)『小学校外国語活動の進め方「ことばの教育として」』(p.196) 東京: 成美堂.